

「十字架につけろ」  
ルカによる福音書 23章 13-25 節

ヘロデのところから戻されてきたイエスさまを前にピラトは再び裁判を始め、祭司長たちや議員たちと民衆を集めて、「訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった」と答えました。ところが、そこにいた人々は、「その男を殺せ、バラバを釈放しろ」と叫んだのです。

この人たちは、つい数日前まで、「夢中になってイエスさまの話に聞き入っていた」人々です。イエスさまがエルサレムに入られた時、ろばの子に乗って、エルサレムに入るイエスさまを見て、「ダビデの子にホサナ」と言って、熱狂的に歓迎した人々です。それが今や、イエスさまではなくバラバを釈放しろと叫んでいるのです。

なぜでしょう。確かな理由は聖書には書かれていません。けれども、この、よくわからないけど、群衆に飲まれて、なんとなく行ってしまう。それも、よく考えもせず無責任に、その声が大きければ大きくなるほどに同調してしまう。これが人間の恐ろしいところでもあり、罪深いところでもあります。

人々が釈放を求めたバラバという人は、当時「熱心党」と呼ばれた反ローマ勢力のリーダーの一人であったのではないかと考えられています。だから、人々が、イエスさまよりもこのバラバの釈放を求めたというのは、バラバの方がイエスさまよりローマからの独立をもたらしてくれると期待したからかもしれません。ユダヤ人たちが求めていた「救い主」とは、ローマの支配から解放してくれる王としての姿でした。人々は、イエスさまこそ、その王ではないかと期待していました。けれども、イエスさまが自分たちが望んでいた救い主ではないことが分かると、途端に裏切られた気持ちになり、そんなやつは「いらぬ」となるのです。彼らにあったのは、自分の望み通りになる、自分にとって都合の良い「救い」だけでした。

人々は「十字架につけろ」と叫びます。申命記 21 章 23 節には「木にかけられた死体は、神に呪われたものだ」と記されています。そして、イエスさまは十字架につけられて死ぬことにより、神さまの呪いを受ける者となられたのです。神の独り子が神さまに捨てられ、一切の神の祝福を奪われた者となられたのです。

では、イエスさまが神さまの呪いを受ける者になることによって、何が起きたのか。聖書はバラバという死刑囚が釈放されたと告げます。バラバが赦されたのは、彼が自分の罪を償ったわけでもなく、心を入れ替えたことへの報いでもありません。彼は何も知らず、何もしないで、赦され、解放されたのです。そして、このバラバの身の上に起きたことこそ、私たちの上に起きたことなのです。主イエス・キリストは、まさにこの私のために、私の罪を背負って十字架にかかって死んでくださったのです。本来、裁かれ、その罪の故に神に捨てられるべき私たちが、主イエスの十字架によって赦され、生かされ、神の子とされ、永遠の命へと招かれたのです。

私たちは、イエスさまに向かって「十字架につけろ」と叫んでしまう者です。愛と真実にとどまり続けることが出来ない者です。しかし、私たちは同時にバラバでもあります。私たちは赦されているのです。ただ主イエス・キリストが私の命と引き換えに死んでくださったので赦されている。この神の愛と神の真実に生きる者でありたいと願います。